

1

I 生命の神 II 生命れる

2 歳をとらない (完答)

3 ウ

4 A エ B ア C イ (記述題)

6 ウ 7 上 (完答) 8 給 9 水の重要性

9 エ 10 A な B よ C い (完答)

11 a 年頭 b 服用 c 熱気

1 a 口調 b 風景 c 心配

2 A エ B ア C ウ 3 エ 4 ドラマ

5 前の会社は 6 スイツチ

7 感傷 8 (記述題) 9 ウ 10 ア 11 この町

1

5 寝ている間に体の水分が失われ、朝にドロドロの血液に変わり、心筋梗塞や脳梗塞の危険性が高くなるから。

(同意可)

2

8 思っていたよりも早く「私」が会社の近くを通ると分かり、急いで見送りをしようとおわてたから。

(同意可)

配点	
1 10・11 2 1・2	各2点×12=24点
1 5 2 8	各6点×2=12点
その他	各4点×16=64点
100点	

1

- 1 直後の段落の冒頭が「お正月がなぜおめでたいかと言うと」で始まっているので、この段落に理由が書かれているということがわかる。あとは設問に用意された空らんの前後の言葉をもとに必要な内容を拾い上げていけばよい。
- 2 ここでの『本朝食鑑』の内容は、直前の段落で説明していたことの根拠となる出典として挙げられているととらえることができる。「お茶をフクヨウすると」の部分が「酒や茶、朝炊きに用いると」に対応しているので、傍線部は「歳をとらない」となる。
- 3 「不適當なもの」を選ぶことに注意すること。ウは「希少な」というのがおかしい。水自体はどこにでもある水である。
- 4 Aは「宝ものように」とたとえているので「まるで」が入る。ここに「とても」を入れるとCに入れるものがなくなる。Bは「個人差がある」ことをいったん認める「もちろん」が入る。Cは後の内容を強調するための「とても」が入る。
- 5 朝によくはない状態になっていることを説明すればよい。直前にその内容が書かれている。さらに前には朝に「心筋梗塞や脳梗塞」の危険性が高くなることがわかるところがある。
- 6 この後の段落に、「初めは八〇パーセントあった体の水量の割合」と書かれている。「生まれたばかりの赤ちゃん」は「初め」ということだから入れる数字は八〇となる。
- 7 この傍線部が「老化防止」の意味となっていることをふまえて次の文を読もう。「水の上手な補給」が「老化防止」に有効であることが説明されている。
- 8 何を「伝えてくれた」のかと考える。この文章を通して筆者が伝えたいことでもあった。『若水汲み』は水の重要性を示している「というところを見ればはつきりする」。
- 9 アは「毎日」というのがおかしい。「元旦」である。イは「書かれていることによつて」と、因果関係をつくっているのがおかしい。ウは「必ず」という言葉が言いすぎである。
- 10 A「はなばなし」は「はなやかで、見事であるさま」、B「よそよそしい」は「他人行儀であるさま」、C「いまましい」は「非常に腹立たしく感じる」という意味である。
- 11 aは「年のはじめ」のこと。「念頭」と書かないように注意しよう。bは本来「薬を飲む」ことだが、「若水でたてたお茶」の効能から考えて薬あつかいできる。「フク」と読む漢字は多いので別の字を書かないようにしよう。cはこの場合は「病気などで高くなった体温」のこと。

2

- 1 aは「ものの言い方のようす」を表す。bはこの場合「目に映る広い範囲のながめ」で、いわゆる景色のことである。cは「配」の右側の画数に注意しよう。三画である。
- 2 イは「学校にも行かず、就職しようともせず、職業訓練も受けない若者」のこと。オは「上着」の意味で使うものと、「一区画」や「テニスなどの競技場」の意味で使うものがある。カはコンピュータゲームにおける「不正行為」を指すが、少しずつゲームに限らず広い意味で使われるようになってきた。
- 3 直前の二行が涙のきっかけと考えると、エになる。アは「もう一度あの会社でやり直したい」とあるが、そんなことを考えているという根拠はない。イは「絶望的な気持ち」というのが言いすぎである。ここではプラスの気持ちではないのでウは違う。
- 4 去つていく剛志に対してグラウンドから手を振ることを指して言っている。それをここでは「子どもらしい発想」と少しバカにしていたのだが、この後で去つていく自分に対して会社の人々が手を振ってくれたという、似たようなことが実際に起きたのである。それを私は同じように「みんな子どもみたい。ドラマの見過ぎだって言うの」と表現したのである。
- 5 誘いを断るのは「誰ともちゃんと向き合わずに過ごしてきた」ということとつながる。その理由は「前の会社はよかった、こんな町は嫌いだ、どうせすぐにいなくなるんだから」という思いであることが示されていた。「ここより前から」という指定にも注意。
- 6 文章の前半に、「私はこの一年間、スイッチを入れたことがあったんだろうか」と、「スイッチを入れなかった自分」を少し悔やんでいるところがある。そのイメージを保持したまま読み進め、この空らんにさしかかったときに「スイッチを入れなかった自分」と結びつけることができれば容易であった。空らん直後の「を入れてちゃんとみんなと向き合っていたら」は「誰ともちゃんと向き合わずに過ごしてきた」との関連表現である。
- 7 この後を読み進めていくと「さつきまでの感傷的な気分」というのが出てくる。これが傍線部付近の「私」の気分であったと結びつけて読むことが重要である。
- 8 傍線部の「不機嫌そうな声」や「舌打ちの音」に惑わされてマイナスの方向で書いてはいけない。この社長はふだんからこういう態度を出してしまう社長なのである。この後に起きたことを考えれば、この電話を切つて急いで大きな紙を出すように動いたということが想像できるだろう。
- 9 一年間まともに向き合わなかった会社の人たちが最後に自分に向けてしてくれたことに感動したのである。アは、剛志の様子は嬉しくないことはないだろうが、それが「何よりも嬉しかった」というのはおかしいだろう。ここでのメインは会社の人たちがしてくれたことに対するものである。イのようなマイナスの心情で流している涙ではない。エは前半はよいが、「急に悲しくなった」という部分はおかしい。
- 10 直前の園田さんのメールから、このときの涙は社長が自分に対してお礼を言ったことに対する涙であることがわかる。そう考えるとウやエは大きく方向性がずれている。イは「腹が立っている」がおかしい。そもそも物語の展開上、ア以外の選択肢はおかしいという考え方もできる。
- 11 ここは少し「私」が言ったことだというのがわかりにくいかもしれない。剛志に向けて「ねえ、お母さん（私）も（あなたと同じように）この町に来てよかったな……」と伝えているのである。

以上